



大明小学校 校長室から

令和2年2月4日

No. 58

文責 校長 飯久保一男

日本の美しい礼儀・作法 …相手を敬い、思いやること

あいさつをする子としない子の違いは？ 話し方講師でフリーアナウンサーの池崎晴美さんの著書「12歳までに身につけたい『幸せな人づきあい』の習慣」には次のような文があります。



子どもが小学生のとき、わが家に友だちがお泊りにきたことが何度かありました。そのときに「あれ？」と思ったのが、あいさつをする子としない子がいたことです。「おはようございます！」と言う子もいれば、何も言わずに朝食のテーブルにつく子もいます。「いただきます！」と言う子もいれば、黙って食べ始める子もいます。あいさつをしなかった子にさりげなく聞いてみると、やはり家でも「おはよう」や「いただきます」は言わないとのことでした。親があいさつをしていれば、子どももあいさつを身につけることを実感したのです。あいさつのできる子にしたいのなら、まずはお母さんがあいさつのできる親になることです。もちろん、お父さんもです。

家庭のなかであいさつが空気のように当たり前になると、子どもはあいさつに苦手意識をもつことにはなりません。息子の友だちでとても礼儀正しい子がいました。家にあがるときは「こんにちは。おじゃまします。」と言って自分の靴を揃え、返事は「はい。」とはっきり言い、おやつを出すと「ありがとうございます。」と頭を下げ、帰るときには「さようなら。おじゃましました。」と言って帰りました。小学校4年生です。とてもしっかりしていると感心しました。そんなふうに、相手に好印象を与えられるようになるとステキだと思いませんか？

あいさつの習慣をつけるもっとも簡単で効果的な方法は、親自身がふだんの生活であいさつの言葉を口にする事、これに尽きます。親があいさつをしないと子どももあいさつを口にしません。

もう一つの親の影響に関するエピソードです。息子の友だちに笑顔を見せない女の子がいました。彼女は子ども同士で遊んでいるときは笑顔を見せるのですが、大人に対しては滅多に笑顔を見せないのです。話しかけても無表情で、返事をするときも言葉は少なめで、あいさつもするにはしますが、表情に乏しくて少し気になっていました。実は、彼女の母親が感情を表に出さないタイプでした。悪い人ではないのですが、ちょっとつかみどころがない感じの人でした。その母親の影響をお子さんが受けていたようです。母親にしても子どもにしても、笑顔がとってもステキなのに、ずいぶん損をしていると思いました。明るい表情であいさつが上手にできるようになれば、本来の魅力を出し切れるのに…。

脳は、笑顔になると心も楽しくなるというしくみをもっています。笑顔になると楽しくなり、笑顔がないとマイナスになるわけです。ですから、知らず知らずのうちに怖い顔になってあいさつをしていると、マイナス思考を相手にぶつけてしまうこととなります。笑顔のあいさつはプラスの思いを伝えるので、そのあとの会話もまったく変わってきます。こちらが笑顔になれば相手も笑顔になるので、笑顔のあいさつがもたらす効果は、相当なものなのです。



何度も言いますが、お子さんのあいさつは親次第です。

日本で生活をしていく子どもたち、未来の日本の担い手である子どもたちにとって、日本の礼儀や作法は身につけるべきことです。南アルプス市では、「小笠原流礼法」を活かした心の教育を推進しています。道徳の「小笠原流礼法」の授業の中でもあいさつの仕方やお辞儀の仕方などを学んでいます。

…つい先日、校長と6年担任は、市教育委員会に集められ、卒業証書を授与する際の礼法を学んできたところです。

ホームページの【学校評価】の項目をご覧ください。後期（第2回）の学校評価を掲載しました。第1回・第2回ともに、保護者・教職員ともに、いちばん評価が低かったのは<あいさつについて>の内容です。教



職員の評価の中で2番目に評価が低いのが<給食について>の内容です。

□本校の保護者、教職員は子どもたちのあいさつに満足していません。

□本校の教職員は給食のマナーや食べ残しの量の多さなどに満足していません。

これらの内容は、家庭で取り組んでいただきたい内容でもあります。

礼儀・作法は、あいさつばかりではありません。整理整頓の仕方、掃除の仕方、敬語などの話し方、トイレや風呂の使い方、着る物の脱ぎ方・たたみ方、履き物の片づけ方、電話のかけ方、お茶の出し方、飲み方、お礼の言い方、箸の持ち方、茶碗の持ち方、食べるときの姿勢…数え上げたらきりがありません。

これらを、一つ一つ身につけて信頼される人になってほしいと思います。大したことではないといい加減にしておいて、大人になって笑われ、信用をなくしてしまうのは、他ならない子どもたち自身です。「小笠原流礼法」は何を大切にしているかという、相手を敬い、思いやる気持ちなのです。相手を敬うこと、思いやることが、日本人の美しい礼儀や作法のもとになっています。あいさつはそのはじめの一歩でもあります。

朝の体育館での全校集会の出来事である。

最初に校長が全校生徒に向けて話をし、表彰式も行った。

その後は、学年ごとに分かれ、健康観察や担任からの指示・伝達が行われた。

それらが終われば、学年ごと解散となるので、生徒たちは体育館の出口に向い、校舎へと移動する。

3年生が1番早く終了し、体育館の出口にある下駄箱に向かって足早に移動を始めた。

そんなとき、ある3年男子生徒のとった行動は、私自身を不可解にさせるものであった。

その行動とは、体育館の出口にいちばん遠い場所で解散したのに、

その場で自分の履いていたシューズを脱ぎ、手に持って移動を始めたことだった。

これが夏の時期であれば、体育館の出口が混雑するのを避け、

少しでも早く下駄箱に自分のシューズを置きたいための行動かと想像できなくもない。

しかし、時期は12月を迎え、体育館フロアの冷たさも足に堪えようかという寒い時期である。

私は、彼に尋ねてみた。

「なぜ、そんなに早くシューズを脱いで移動したの？」

すると彼の返事は、私の予想した考えを、根底から覆すものであった。

「まだ話が終わっていない学年があったので、音をたてないようにと思い、脱ぎました。」

という答えだったのである。

シューズのかかとを踏んで歩く生徒を、これまで度々注意することはあったが、

逆に今回の出来事は、そんな浅はかな自分自身の考え方を反省するとともに、

子どもたちのもっている素直で純粋な気持ちに触れ、

心が温かくなる朝の出来事となった。



※写真は本校児童玄関の下駄箱です。
「心に響くちょっといいはなし」より

※中学校の話です。本校は体育館でも校舎内でも同じ上履きで活動しますが、学校によっては体育館用のシューズがあり、体育館では履き替えて活動する学校もあります。